

2026年3月8日（日）

令和8年

関東柔道選手権大会兼全日本柔道選手権大会関東地区予選
関東女子柔道選手権大会兼全日本女子柔道選手権大会関東地区予選
審判会議資料

1 競技規則及び方法(大会要項抜粋)

- (1) 国際柔道連盟試合審判規程及び全日本柔道選手権大会申し合わせ事項にて行う。

【2026年1月6日に改訂したIJF新ルールは適用しない。】

- (2) 試合時間 5分間

- (3) 勝敗の決定基準

「一本」「技あり」「有効」「僅差」とする。

抑え込み時間は、20秒で「一本」、15秒以上で「技あり」、10秒以上で「有効」とする。

「僅差」とは、試合時間内に勝敗が決しない場合は、延長戦を行わず、旗判定にて僅少差をもって勝敗を決する。その基準は試合態度、技の効果と巧拙^{こうせつ}、及び反則の有無等を総合的に比較する。攻撃を高く評価するため「指導」の数のみを持って判定の材料とはしない。

「指導」による罰則は、4回目が与えられた時点で「反則負け」とする。

- (4) 立ち姿勢において、相手と組んだ状態で攻撃・防御のため、相手の帯から下を掴む(触れる)ことは反則(指導)とはしない。但し、相手と組んでいない状況で直接相手の帯から下へ攻撃を行うことは反則(指導)とする。

- (5) 寝姿勢から立姿勢に移行したときには、「待て」を宣告して試合を止める。

- (6) 試合は、試合場内で行うものとする。立姿勢においては、両足が場外に出るか相手を故意に場外に押し出した場合は反則(指導)とする。

- (7) 立姿勢において、標準的ではない組み方を継続する。若しくは繰り返す場合は反則(指導)とする。但し、直ちに攻撃を行えば「指導」は与えない。

- (8) 全柔連柔道衣規格に合格した柔道衣(上衣、下穿、帯)を着用すること。柔道衣の大きさ又は規格が規定に合わない場合は出場を認めない。(赤ラベルのみ使用可)

2 本大会申し合わせ及び確認事項

(1) 柔道衣コントロール（IJF が 2022 年 1 月に改正したもの）

開会式前に審判員が柔道着コントロールを行う。

※ 試合開始後、疑義が生じた場合は、当該審判員が計測し適合しないと判断した場合は、大会審判長に報告の後、大会審判長は大会実行委員長と協議をした上、最終決定をする。

このとき適合しないと判定された場合は、「棄権勝ち」が相手に与えられる。

(2) 「不戦勝ち」の場合、選手を試合場に入れて「勝ち」を宣告する。

(3) 立技、寝技ともに審判員が危険と判断した場合は「待て」とする。

(4) 隣接する試合場間での「抑え込み」は「抑え込み優先」とする。

また、「抑え込み」が試合場外の設置物等との接触により公平な寝技の攻防ができないと審判員が判断した場合は「待て」とする。

(5) 医療処置関係（出血を伴う負傷）

出血を伴う同じ部位の負傷は、医師による手当てを 2 回まで受けることができる。同じ部位の 3 回目の出血の時点で、主審は相手の試合者に副審と合議のうえ「棄権勝ち」を与える。

(6) 「絞め落ち」関係

ドクターを呼び、ドクターが到着するまでは、主審は選手に必要な処置を行う。

ドクターに選手を預けた後、「勝ち名乗り」をして、主審は最後に畳を降りる。

(7) 男女ともに決勝戦のみを指名審判員とする。

3 審判上の確認事項

(1) 礼法について

審判員は自らの礼法を正しく行くと共に、選手の礼法もコントロールする。

(2) 「スコア」の判断基準

【全柔連 2025 年 1 月 1 日施行】を適用する。

「技あり」～ 体側面が背中側に 90 度を超えて倒れるなど。

「有効」～ 体側面が 90 度から若干うつ伏せ、肘の着地は背中側に 90 度以上傾くなど

(3) 寝姿勢から立姿勢に移行したときには、「待て」を宣告して試合を止める。

ア 双方が寝姿勢の攻防中に同時（又はほぼ同時）に立ちあがる場合、「待て」を宣告する。

イ 一方の選手が背中に抱きつき、相手が四つ這い（寝姿勢）となって、攻防中に同時に立ち上がる場合、「待て」を宣告する

ウ 概ね向かい合う四つ這いの相手（寝姿勢）が立ち上がった瞬間、「引込返」等で返した場合、その後の寝技の攻防は認めるが、投技のスコアは認めない。

エ 双方が寝姿勢での攻防中に同時に立ち上がった場合、「待て」を宣告する。

(4) 立姿勢において、標準的ではない組み方を継続する。若しくは繰り返す場合は反則（指導）とする。但し、直ちに攻撃を行えば「指導」は与えない。

ア 標準的でない組み方で、直ちに技を施さないことは、反則（指導）とする。

イ 標準的でない組み方で、直ちに技を施すことは反則（指導）としない。

ウ 但し、標準的でない組み方を繰り返すことは反則（指導）とする。

エ その他の標準的でない組み方（袖口に指を入れて握る等）を継続する若しくは繰り返すことも、反則（指導）とする。

※ その他 ～ ピistol・ポケットグリップ、帯、袖口に指を入れて握る等

(5) 試合は、試合場内で行うものとする。立姿勢においては、両足が場外に出るか相手を故意に場外に押し出した場合は反則（指導）とする。

但し、一方の選手が不用意に場外に出たのか、或いは相手選手が場外に押し出したのか不明瞭な場合は双方に「指導」を与えないものとする。

ア 後方へ下がり、投技の攻防なく両足が場外へ出ることは、反則（指導）とする。

イ 相手を故意に場外に押し出すことは、反則（指導）とする。

ウ 両足が場外に出た後から施された投技は、スコアを認めない。

エ 試合場内で投技を施した後に双方が場外に出た場合、瞬間的に固技を施し、直ちに極まればその技の効果を認める。但し、直ちに極まらない場合、「待て」を宣告する。

オ 片足が場外に出ている状態が継続している場合でも、反則（指導）は与えない。

※ 「片足が場外に出ている場合、直ちに攻撃しない、もしくは直ちに場内に戻らない場合、反則（指導）」は適用しない。

(6) 偽装攻撃

ア 取が投げる意思がない場合

イ 取が組手を持たずに攻撃する、またはすぐに組手を放す場合

ウ 取が単発の偽装攻撃や、相手のバランスを崩さない状態で繰り返し攻撃を行う場合

エ 取が脚を受けの両脚の間に入れて、攻撃の可能性を妨ぐ場合

オ 取が現実的に投げる可能性がない場合

※ いわゆるバッドアタックを繰り返したことに對して、相手側に消極的として「指導」を与えないように留意する

以上

【以下参考】

【講道館 HP】
全日本選手権大会
審判規程解説



【IJF HP】
2026.1.6
審判規程改訂

